

フランス語とルーマニア語における 定冠詞の分布について

藤田 健

Distribution of the Definite Articles in French and Romanian

Takeshi FUJITA

要旨 : The definite article occupies the primary position in the article system in French and in Romanian. We examine the syntactic distribution of the definite article in a corpus (a French text and its Romanian translation), taking into account the distributional correspondence between the definite article and other determiners, the null article included. We conclude that the Romanian definite article has a close connection with the null article and assumes a part of the functions of the possessive adjectives in French. It is also confirmed that it has important morpho-syntactic characteristics which are not found in the French definite article.

キーワード : definite article, French, Romanian

1. 序論

冠詞という文法カテゴリーを有する言語において、この要素は名詞句において極めて重要な文法的役割をはたす。その中でも、ロマンス諸語は冠詞体系が発達している言語群であると言えるが、個々の冠詞の機能については言語間で差異が観察される場合がある。フランス語は同グループの中でも、冠詞の体系化が進んでいる言語であると言える。これに対し、ルーマニア語は冠詞が他のロマンス諸語には見られない形態統語的な特徴を有しており、それが分布にも影響している。フランス語の冠詞については様々な観点から研究が進められているが、ルーマニア語に関してはあまり行われておらず、両言語間の対照的視点からの研究となると皆無と言ってよいのが現状である。

冠詞の中でも、定冠詞は多くの機能を有し、最も使用頻度が高い要素である。定冠詞の機能を考察する上では、定の決定詞としての位置づけが極めて重要である。定の決定詞全体の中で定冠詞の分布・機能を考察することによって、はじめて明らかになる本質が存在する。本稿では、フランス語とルーマニア語の定冠詞の機能を対照的に

考察すべく、その分布を詳細に検討し、指示形容詞や所有形容詞といった他の定の決定詞との対応に焦点をあてて分析を進めていく。これにより、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞という冠詞体系内のみでの考察ではとらえられない定冠詞の特質を明らかにしたい¹。

2. 両言語における定冠詞の位置づけ

ここでは、フランス語とルーマニア語の定冠詞が従来どのように分析され、どのような形で位置づけられてきたかを見るために、先行研究を概観する。

2.1. フランス語

多くの記述文法や論考において、フランス語は3種類の要素からなる冠詞体系をもつとされている。すなわち、西ヨーロッパの諸言語に一般的に見られる定冠詞・不定冠詞に加え、部分冠詞というカテゴリーが設定される²。

Grevisse(1993)によると、定冠詞の機能は、発話者(*locuteur*)と対話者(*interlocuteur*)のいずれにも既知である人やモノを指示する名詞の前に置かれるとする。具体的には、両者に共通の経験の一部をなす実体(1a)、状況によって同定可能な実体(1b)、名詞を修飾する補部によって同定可能な実体(1c)、不定冠詞で導入された実体(1d)を表す名詞に前置される(p.865)。

(1) a. Le soleil luit pour tout le monde.

the sun shines for everyone “太陽は皆のために輝く。”

b. Donnez-moi la clef.

give me the key “鍵をください。”

c. J'ai pris la route qui conduit à Reims.

I took the route which leads to “私はランスに通じる道を通った。”

d. Il était une fois un Bûcheron et une Bûcheronne qui avaient sept enfants,

it was a time a woodman and a wife of a woodman who had seven children

tous garçons... on s'étonnera que le Bûcheron ait eu tant d'enfants en si

all boys one will be surprised that the woodman has had so many children in so

peu de temps.

little time

“昔、七人の子供をもつ樵とその妻がいました。すべて男の子でした。そんなに短い期間でそれほどの子供ができたことに驚かれるでしょう。”

Grevisse は他に、種(*espèce*)・カテゴリーを対象とする用法も指摘している。

¹ 本研究は、平成 29 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 15K02465) による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表するものである。

² このような見方はフランス語の冠詞の分析において支配的なものであり、Grevisse(1993), Wagner and Pinchon(1991), Leeman(2004)の他に、Deloffre et Hellegouarc'h(1988), Hollerbach(1994), Judge and Healey(1995), Price(2003)も同じ立場に立つ。Martinet(1979)は部分冠詞に関して、部分を表す「de」と現働化詞(注 5 参照)である定冠詞に分ける見方を提示しているが、基本的な考え方は共通していると言える。

(2) Le chien est l'ami de l'homme.

the dog is the friend of the man “犬は人類の友である。”

また、Judge and Healey (1995)は、身体部位を表す名詞の前で用いられることを指摘している³。それには、様態を表す表現の一部をなす場合、属詞を伴う場合、所有者が明確でありかつ主語の位置にない場合のいずれかの条件を満たすことが必要である(p.29)。この用法は、所有形容詞の機能の一部を定冠詞が担っているものと考えられる。

(3) a. Elle marchait le dos courbé contre la pluie.

she walked the back bent against the rain

“彼女は雨に対して背を曲げて歩いていた。”

b. Il avait les mains sales.

he had the hands dirty “彼は手が汚かった。”

c. On risque de se casser le cou.

one threatens to break the neck “首の骨を折る危険がある。”

定冠詞の機能の理論的位置づけに関しては、Wagner et Pinchon(1991)が、談話において既に述べられているものを指示する照応的(anaphorique)用法と、最も大きな外延(extension)で捉えられる概念を喚起する一般化(généralisant)の機能とに大別している。前者は定冠詞の歴史的起源である指示形容詞の機能を継承しているのに対して、二つ目の用法は現代のフランス語が獲得した特徴である(pp.93-94)。Wagner et Pinchonによると、名詞以外のカテゴリーに属する語を名詞化する定冠詞の機能は、一般化の機能の中に位置づけられる。

Deloffre and Hellegouarc'h(1988)は、同類の他のものから当該要素を区別する排他性(exclusivité)という性質を、指示詞から継承していると述べている(p.137)。また、一般化の機能において不定冠詞と競合関係にあるが、不定冠詞は意識が個別化の方向に向けられるのに対して、定冠詞は一般化の方向に向けられる点で異なるとしている。

Martinet(1979)は、定冠詞は定(défini)⁴という意味以外には何らの意味的要素も含まないため、指示される対象が明確に同定されるという条件が満たされれば、あらゆる場合に使用可能であるとし、唯一性や総称性といった他の意味機能は定という中核的な意味や文脈によって引き出されると主張する(p.41)⁵。定を示す要素としては、他に所有形容詞や指示形容詞が挙げられるが、Leeman(2004)はこれらと定冠詞が異なるのは、定冠詞は指示対象の拡張(extensité)の境界を定めるという量化(quantifiant)の機能しかもたない中立的な要素であるのに対し、他の二つの要素は特徴づけ(caractérisant)という別の機能も併せ持っているという点であると述べている(p.63)。

³ Price(2003)も同様の指摘をしている。

⁴ 「定」とは、ある要素の存在が既に確立されていることを指す(Leeman(2004))。一般化も定の機能の一つであると考えられる。

⁵ Martinetは、冠詞を現働化詞(actualisateur)というカテゴリーに属するものにとらえている。現働化とは、ある要素について現実性を喚起する作用を指し、その作用を行う要素が現働化詞である。名詞の場合は冠詞をはじめとする決定詞(déterminant)が現働化詞である。

2.2. ルーマニア語

ルーマニア語の定冠詞は、他のロマンス諸語とは異なる形式と機能を有している。以下にその特徴を概観する。

2.2.1.形式

ルーマニア語の定冠詞は、名詞に先行するのではなく、後接語(proclitic)として名詞に後続するという形態的特徴をもつ。定冠詞が名詞に後続している名詞形式は定冠詞形と呼ばれる。他のロマンス諸語とは異なり、ルーマニア語には主格・対格と属格・与格の形態的対立が人称代名詞のみならず名詞にも存在し、定冠詞も名詞の格に応じて変化する⁶。さらに、名詞の性として男性・女性の他に中性があるため、形式がより複雑になる。以下に代表的な例を示す。

(4)

	単数無冠詞形	単数定冠詞 主格・対格形	単数定冠詞 属格・与格形	複数無冠詞形	複数定冠詞 主格・対格形	複数定冠詞 属格・与格形
男性名詞	an「年」	anul	anului	ani	anii	anilor
女性名詞	casă「家」	casa	casei	case	casele	caselor
中性名詞	taxi「タクシー」	taxiul	taxiului	taxiuri	taxiurile	taxiurilor

これに加えて、ルーマニア語には独特の冠詞が存在する。一つは指示冠詞(articolul demonstrativ)もしくは形容冠詞(articolul adjectival)と呼ばれる形式で、様々な機能を持つが⁷、代表的な機能の一つとして、形容詞の最上級の形成があげられる。これは、フランス語の定冠詞がはたす機能と共通している。

(5) cea mai dulce înghețată

指示冠詞 more sweet ice cream “一番甘いアイスクリーム”

もう一つは所有冠詞(articolul posesiv)と呼ばれる形式で、代表的な機能として、定冠詞形でない名詞に属格形名詞が修飾要素として後続する場合に、両者を連結する機能がある。この場合、所有冠詞は先行する名詞と性数一致する。

(6) o carte a studentului

a book (女性) 所有冠詞 (女性形) student's-the “生徒の本”

この機能はフランス語の定冠詞には存在しないものである。これに対して、共通する機能と考えられるのは、以下のように後続する所有形容詞とともに所有代名詞の働きをするというものである。

⁶ 厳密には呼格も存在するが、ルーマニア語の格体系においては周縁的であると考えられるため、本稿では省略する。

⁷ その他に代表的な機能として、形容詞や「前置詞 de+名詞・代名詞」に先行してこれらの要素を名詞化したり、定冠詞形名詞に後続する形容詞に付加されて特定性を表す機能などがある。

a. cel negru b. haina cea verde
指示冠詞 black “黒のもの” dress-the 指示冠詞 green “その緑色の服”

前者の機能はフランス語の定冠詞にも見られるが、後者は見られないものである。

(7) frații mei și ai tăi “私の兄弟と君のそれ（兄弟）”

brothers-the my and 所有冠詞 yours

このように、ルーマニア語の指示冠詞と所有冠詞は、必ずしもフランス語の定冠詞と同じ機能をはたすわけではないが、共通する機能も見られる。本稿ではフランス語との対照言語学的観点から、共通する機能についてはこの二つの冠詞を定冠詞と同等に扱うものとする⁸。

2.2.2. 機能

定冠詞を含む冠詞（以下定冠詞類と呼ぶ）の機能を詳細に提示したものとして、Pană Dindelegan(2003)があげられる。ここでは、これに従い、定冠詞類の様々な機能を概観する。

まず重要な機能としてあげられるのは、意味機能である。それは名詞の現働化(actualizare)、すなわち個別化(individualizare)、決定(determinare)であり、名詞によって指示される対象のクラスを対話者にとって既知である、あるいは同定可能である対象に限定することである。この個別化の機能には、照応的(anaforic)機能と直示的(deictic)機能がある(pp.33-34)。(8)の a が照応的機能の例で、b が直示的機能の例である。

(8) a. Am primit un câine. Câinele mi-a făcut mare plăcere.

I received a dog dog-the me made big pleasure

“私は一匹の犬を迎え入れた。その犬は私に大いなる喜びを与えた。”

b. Dă-mi cartea!

give-me book-the “(ジェスチャーで示しながら) その本をちょうだい。”

定冠詞の機能を複雑にしているのが、個別化とは相反するいわゆる総称的(generic)解釈である。この解釈はどのような統語的位置においても可能である(p.34)。

(9) a. Câinele este un animal devotat omului.

dog-the is an animal faithful to-man-the

“犬は人間に忠実な動物だ。”

b. Ador câinele pentru devotamentul lui.

I like dog-the for devotion-the its

“私はその忠実さゆえに犬が大好きだ。”

c. În componenta lui GN, apare un adjectiv⁹.

in construction-the of NP appears an adjective

“名詞句構造の中に形容詞は現れる。”

指示冠詞・所有冠詞に関しては、個別化の機能を有しているという点については疑

⁸ Guillerrou(1953), Goga(2001), Pană Dindelegan(2003), Negritescu and Arrigoni(2014)では指示冠詞と所有冠詞を定冠詞とは区別しているが、Lombard(1974)はこの二つを定冠詞の一種とみなしている。これは、フランス語の定冠詞と共通の機能をもつ点を重視したためであると考えられる。

⁹ (9c)のように属格もしくは与格名詞につく定冠詞は個別化の解釈も可能である。すなわち、先行文脈で言及している要素を指す解釈である。

“わたしの生徒”	“この私の生徒”	“この子供”
d. copilul acesta al meu	e. colegul meu	cel nou
child-the this 所有冠詞 my	colleague-the my 指示冠詞	new
“この私の子供”	“私の新しい同僚”	

ルーマニア語の冠詞が担う重要な機能として、性・数を標示する機能に加え、他のロマンス諸語には見られない形態的機能がある(pp.39-41)。すなわち、名詞の格を標示する機能である。通常は定冠詞は名詞に付加されるが、形容詞が名詞に先行する場合、形容詞に付加される。

(15) plecarea ciudatului oaspete

departure-the of-strange-the guest “妙な客人の出立”

この機能は、他のロマンス諸語のもつ分析的(analitic)な性質とは異なり、ルーマニア語がラテン語の総合的(sintetic)な屈折形態を保持していることによるものである。

指示冠詞も格変化をするが、単独ではなく定冠詞とともに二重に格を標示する。

(16) elevului celui bun

of-pupil-the 指示冠詞 good “そのよい生徒の”

所有冠詞はそれ自体は格変化をしないが、後続する名詞が与格ではなく属格であることを明示する機能をもつ。これは、ルーマニア語では属格と与格が同じ形式で標示されるため、属格であることを特に示さなければならない場合に有効である。

(17) a. echipe aparținătoare clubului Dinamo

team belonging to-club-the (与格) “ディナモクラブ所属のチーム”

b. echipe câștigătoare ale cupei

team winning 所有冠詞 cup-the (属格) “優勝杯を手にしたチーム”

以上のことから、フランス語とルーマニア語の定冠詞は、意味的機能に関しては共通していると言えるが、格標示という形態的機能に関しては異なっている。更に、フランス語の定冠詞の機能の一部はルーマニア語に特有の冠詞である所有冠詞や指示冠詞が担っているという点に留意する必要がある。

3. 両言語における定冠詞の対応関係

本稿では、文学作品の原典とその翻訳を用いて両言語の定冠詞の分布を観察する。分析資料として用いるのは、フランス人作家アンドレ・マルロー(André Malraux)作の「人間の条件(La Condition humaine)」の一部とそのルーマニア語訳(Condiția umană, Irina Eliade 訳)である。一方の言語のテキストにおいて生起する定冠詞が、もう一方の言語のテキストにおいてどのような形式で対応しているかを調べ、数値によってその傾向を示す。

3.1. フランス語の定冠詞のルーマニア語における対応表現

本節では、フランス語の定冠詞がルーマニア語においてどのような形式で対応して

いるかを観察する¹¹。結果は以下のとおりである。

フランス語テキストにおける定冠詞のルーマニア語における対応¹²

ルーマニア語においても定冠詞で現われているもの	2277(77.8)
ルーマニア語において指示形容詞で現われているもの	22(0.8)
ルーマニア語において所有形容詞で現われているもの	25(0.9)
ルーマニア語においてゼロ冠詞で現われているもの	527(18.0)
ルーマニア語において不定冠詞で現われているもの	61(2.1)
ルーマニア語において上記以外の表現で現われているもの	13(0.4)
総数	2925(%)

これを、異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると、以下のようになる。

ルーマニア語において指示形容詞で現われているもの	22(3.4)
ルーマニア語において所有形容詞で現われているもの	25(3.9)
ルーマニア語においてゼロ冠詞で現われているもの	527(81.3)
ルーマニア語において不定冠詞で現われているもの	61(9.4)
ルーマニア語において上記以外の表現で現われているもの	13(2.0)
総数	648(%)

前節で見たように、両言語において定冠詞がはたす意味機能に共通点が多いという事実を考慮すると、一方の言語における定冠詞が他方の言語においても定冠詞で対応するケースが多いことが予想される。ここで注目すべきは、ゼロ冠詞が対応する例の割合が極めて高いという点と、指示形容詞が対応する例の割合が低いという点である。ゼロ冠詞は定性という観点からは不定と位置付けられるもので、定である定冠詞とは対立する要素であるとみなすことができる。それにもかかわらず対応例が多いという事実は、定冠詞とゼロ冠詞について何らかの考察が必要となることを示唆している。この点については、4.1節で論じることとする。

指示形容詞は、定性という観点からは定冠詞と同じく定と位置付けられる要素である。定冠詞と共通する性質を有することから、一定数の対応が見られることも予想されるが、実際には全体の0.8%と低い割合でしか現れない。これは、フランス語の定冠詞とルーマニア語の指示形容詞の間で、機能の共通性よりも相違点が際立っているためであると考えられる。この点について論じるには、ルーマニア語の定冠詞とフラン

¹¹ 本稿では、言語間の対応を見るために、一方のテキストにおいて生起する定冠詞を含む名詞句に、もう一方のテキストにおいて対応表現が見られない例は集計に含めていない。従って、テキストにおける定冠詞の実際の生起数はより大きいものとなる。

¹² 表中の百分率は、小数点以下第2位を四捨五入した数値である。従って、百分率の合計が100%にならない場合もある。

ス語の指示形容詞の対応についても考慮に入れなければならないため、4.4 節で扱うこととする。

また、不定冠詞への対応は全体の 2.1%となっている。定性に関して定冠詞と対立する要素であることから当然低いことが予想されるが、この数値は一定数の対応があることを示している。これについても後に考察することとする。

所有形容詞への対応についても、低い割合でしか見られない。この事実は、フランス語の定冠詞とルーマニア語の所有形容詞との間に機能的共通性が少ないことを示していると言える。所有形容詞は名詞が指示する対象の所有者を示す要素であり、論理的には定性に関して定・不定の両方がありうるが、ルーマニア語では所有形容詞は定冠詞と共起する。

- (18) a. cărțile mele b. copiii noștri c. paharele voastre
books-the my children-the our glasses-the your
“私の本” “私たちの子供” “君たちのコップ”

このため、ルーマニア語の所有形容詞はフランス語の定冠詞と定性に関して同じクラスに位置づけられる。そもそも所有形容詞は所有者を示すという機能がその本質的特徴であるのに対して、定冠詞は意味的に希薄な要素であるため、人称という独自の意味を持つ所有形容詞とは区別されて当然である。フランス語の定冠詞には所有者を指示する機能が限られているために、ルーマニア語の所有形容詞との対応が少ないと考えることができる^{13,14}。

3.2. ルーマニア語の定冠詞のフランス語における対応表現

本節では、ルーマニア語の定冠詞がフランス語においてどのような形式で対応しているかを観察する。結果は以下のとおりである。

¹³ 1.1 でも述べたように、フランス語の定冠詞にも、所有形容詞と共通する機能をもつと考えられる例が存在する。

Il s'est lavé la figure.
he himself washed the face “彼は顔を洗った。”

譲渡不可能な名詞句に定冠詞が添えられた場合、文の中に生起する要素が所有者として解釈される。一方、英語では上記の例に対応する文において所有形容詞が用いられる。

He washed his face.

英語でも定冠詞が用いられる例もあるが、フランス語ほど頻繁には用いられないようである。このような機能は、4.3 で述べるようにルーマニア語の定冠詞も共有することから、場合によってフランス語とルーマニア語の両言語において定冠詞が用いられることになる。

¹⁴ ルーマニア語の定冠詞とフランス語の所有形容詞の対応については異なる傾向が観察される。これに関しては 4.3 で考察する。

ルーマニア語テキストにおける定冠詞のフランス語における対応

フランス語においても定冠詞で現われているもの	2277(81.4)
フランス語において指示形容詞で現われているもの	61(2.2)
フランス語において所有形容詞で現われているもの	185(6.6)
フランス語においてゼロ冠詞で現われているもの	199(7.1)
フランス語において不定冠詞で現われているもの	69(2.5)
フランス語において上記以外の表現で現われているもの	8(0.3)
総数	2799(%)

これを、異なる形式で現われているもののみ注目して分布を比較すると、以下のようになる。

フランス語において指示形容詞で現われているもの	61(11.7)
フランス語において所有形容詞で現われているもの	185(35.4)
フランス語においてゼロ冠詞で現われているもの	199(38.1)
フランス語において不定冠詞で現われているもの	69(13.2)
フランス語において上記以外の表現で現われているもの	8(1.5)
総数	522(%)

フランス語の定冠詞とルーマニア語の対応表現の場合とを比較すると、フランス語におけるゼロ冠詞の対応例の割合がより低い点と、フランス語における所有形容詞の対応例の割合がかなり高くなっている点が顕著である。指示形容詞については、フランス語において指示形容詞で現われている例(2.2%)がルーマニア語において指示形容詞で現われている例(0.8%)よりも若干割合が高くなっているが、両者とも相対的には低い数値である。また、不定冠詞の対応例については両者で割合が類似している。次節では、それぞれの対応例について考察を進めていく。

4. 定冠詞が異なる形式に対応する例の分析

本節では、一方の言語における定冠詞が他方の言語において別の形式で対応する例について、形式ごとに分けて分析を進めていく。

4.1. フランス語の定冠詞 → ルーマニア語のゼロ冠詞

フランス語の定冠詞がルーマニア語においてゼロ冠詞で現われている例は、527 例あり、全体の 18.0%を占めている。この中で、圧倒的に多いのはルーマニア語において前置詞の目的語となっている場合で、447 例あり、全体の 84.8%を占める¹⁵。

(19) a. les jambes revenaient ensemble vers la poitrine, comme attachées ;
 the legs came back together toward the chest as attached

¹⁵ 例文にはテキストにおいて現れるページを示している。

(F p.12)¹⁶

b. Picioarele se ridicau spasmodic spre piept. (R p.24)

legs-the rose cramped toward chest

“両足が一度に胸の方へまるでくっついているようにはね返ってきた。”

これは、2.2.2 で見たように、修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合に定冠詞が生起しないというルーマニア語固有の統語的制約によるものである。なお、Pană Dindelegan(2003)は前置詞 *cu* が例外的に定冠詞を伴う名詞句を選択すると指摘していたが、*cu* が無冠詞名詞句を選択している例も 9 例見られた。以下に一例を示す。

(20) Ceru să fie ascultat cu mare atenție, făcând un semn cu mîna: (p.45)

he demanded that he be listened to with big attention making a sign with hand-the

“彼は手で合図をして、注意深く聞くように求めた。”

この事実は、前置詞が無冠詞名詞句を好むという傾向がルーマニア語において極めて高いことを示している。

前置詞の目的語に次いで多いのは直接目的語で 30 例あり、5.7%を占める。

(21) a. Il s'etait assuré que ce papier était celui qu'il cherchait, mais n'avait

he had made sure that this paper was the one which he was looking for but had

pas eu le temps de le lire. (F p.18)

not had the time to it read

b. Cercetase hîrtia pînă ce fusese sigur că era cea pe care o căuta,

he examined paper-the until he was sure that it was the one which he was looking for

dar n'avusese timp s-o citească pînă la capăt. (R p.31)

but he not had time to it read until end

“この紙片は確かに自分の探していたものであると確信していたが、読んでいる暇はなかった。”

これに次ぐのが主語で 12 例あり、2.3%を占める。

(22) a. Les renforts qui défendaient Shanghai contre les révolutionnaires

the reinforcements that defended against the revolutionists

venaient de Nankin : (F p.27)

came from

b. Întărituri care aveau să apere Shanghaiul de revoluționari soseau din

reinforcements that had to defend Shanghai from revolutionists arrived from

Naejingh. (R p.40)

Nanjing

“革命軍に対して上海を守る増援隊が南京から輸送されつつあった。”

¹⁶ 以下ではフランス語とイタリア語の例文を並置する場合、フランス語を F、ルーマニア語を R と表記して区別する。

主語と直接目的語が一定数見られるのは、省略されない限り必ず完全な文において存在する要素であるという主語の性質と、他動詞文においてはほぼ必ず生起するという直接目的語の性質を考慮すると当然である。しかし、直接目的語の方が主語よりも多いという事実は、後者のみをもつ自動詞文の存在を考えると一考の価値があると言えよう。

その一つの要因として考えられるのが、両者が文において占める構造的位置の違いである。直接目的語は言うまでもなく他動詞によって選択される要素であり、他動詞と直接目的語は統語的にも意味的にも一つのまとまりとして機能する動詞句を形成する。このため両者の結びつきが強くなり、ある程度固定化された動詞句表現として用いられることもある。表現として固定化されると、名詞の指示性が低くなり、冠詞が脱落するという傾向が一般に見られる。実際に見られた用例としては、*a acorda credite* 「信用貸しをする」、*a avea guri înguste* 「入口が狭い」、*a avea umeri pleoștiți* 「なで肩をしている」、*a avea noroc* 「運がある」、*a avea timp* 「時間がある」、*a da foc* 「火をつける」、*a da ordin* 「命令を出す」、*a cere bani* 「お金を求める」、*a fabrica arme* 「武器を製造する」、*a face apel* 「訴える」、*a face semn* 「合図をする」、*a juca biliard* 「ビリヤードをする」、*a juca cărți* 「カードをする」、*a lua arma* 「武器を取る」、*a lua înfățișare* 「容貌を呈する」、*a organiza uniuni* 「協会を組織する」、*a primi comenzi* 「命令を受ける」、*a plăti chirie* 「家賃を払う」、*a refuza comision* 「依頼を拒否する」、*a respinge gând* 「～の考えをはねのける」、*a vorbi franceză* 「フランス語を話す」などがあり、動詞と名詞が固定的に結びつき、特定の概念を表す表現となっている。これに対して、主語という要素は統語的に動詞句の外にあると分析されることが多いように、固定化された熟語表現の一部を形成することは多くはない¹⁷。このことが、直接目的語にゼロ冠詞が比較的多く見られるのに対して、主語において相対的に少ないという事実の一つの要因となっていると言えよう。

4.2. ルーマニア語の定冠詞 → フランス語のゼロ冠詞

ルーマニア語の定冠詞がフランス語においてゼロ冠詞で現われている例は、199 例あり、全体の 7.1%を占めている。フランス語の定冠詞がルーマニア語においてゼロ冠詞で現われている割合は 18.0%であったので、ルーマニア語に比べてフランス語ではゼロ冠詞の生起する割合が低くなってはいるが、決して無視できない数値であると言える。フランス語におけるゼロ冠詞の機能について、Martinet(1979)は無冠詞名詞句、すなわち現働化詞を伴わない名詞は現働化されていないのではなく、現働化詞以外の手段、すなわち文脈や統語的環境によって現働化されていると説く。ルーマニア語では、前置詞句の目的語において無冠詞名詞句が要求されるという統語的要因によるものが大半を占めているが、フランス語におけるゼロ冠詞がどのような統語的環境において生起しているかを以下で観察する。

統語的分布を見る前に、留意しなければならない点がある。語彙的な理由でフランス語ではゼロ冠詞が用いられるのに対し、ルーマニア語では定冠詞を伴う場合である。

¹⁷ 生成文法をはじめとする統語理論において、文の構造において主語が階層的に高い位置に位置づけられることは、このような言語直観を反映しているものと言える。

一つは国名・地名・肩書を示す名詞であり、China「中国」、Franței「フランス」、Indochina「インドシナ」、Shanghaiul「上海」、Domnul「主、神」、domnul Clappique「クラピック氏」など 16 例見られた。また、不定代名詞 un「あるもの」もフランス語では無冠詞なのに対し、ルーマニア語では定冠詞を伴う要素で、10 例見られた。

これらの例を除いた上で統語的な分布を見ると、最も多いのは前置詞句の 107 例であり、全体の 54.0%を占める。この中で、ルーマニア語において修飾要素を伴っている例に対応するフランス語の例は 45 例、ルーマニア語において属格となっている例に対応するフランス語の例は 25 例である。これら二つの対応例は、既に述べたようにルーマニア語固有の形態統語規則によって定冠詞が要求されるものである。これ以外で顕著な例は、方向を表す右(フランス語 droite, ルーマニア語 dreapta)と左(フランス語 gauche, ルーマニア語 stînga)を表す名詞が前置詞に後続する場合で、23 例見られた。これらの語は、前置詞の後でも定冠詞形で現れるという点でルーマニア語において例外的な性質をもっていると言える。その他の例はわずか 14 例となっており、このうちフランス語でもルーマニア語でも前置詞の目的語となっている例は 4 例のみであった¹⁸。以下に一例を示す。

(23) a. Tchen a fermé à clef. (F p.22)

closed with key

b. Cen aînchis ușa camerei cu cheia. (R p.36)

closed door-the of-room-the with key-the

“陳はドアを閉めて鍵をかけた。”

このことから、ルーマニア語の定冠詞形がフランス語の前置詞の目的語としてゼロ冠詞形に対応する例は、形態統語的な規則や一部の特殊な語彙を除けば極めてまれであることが分かる。

前置詞の目的語以外の例については、用例が分散している。ある程度の数が見られるのはフランス語における名詞文の 15 例（うち修飾要素を含む名詞句が 11 例）、付帯状況を表す名詞句の 13 例（うち修飾要素を含む名詞句が 1 例）、並列表現が 12 例となっている。

I. 名詞文

(24) a. Pauvre petite ! (F p.49)

poor little

b. Sărăcuța. (R p.63)

poor-the “かわいそうに”

II. 付帯状況

(25) a. L'homme le transmit, resta à sa place revolver au poing. (F p.77)

the man it passed remained at his place revolver at-the fist

¹⁸ フランス語の前置詞 en は基本的にゼロ冠詞を伴う名詞句を選択するという語彙的特性をもつが、en 以外の前置詞についても、その目的語にゼロ冠詞が観察される例が一定数見られる。

- b. Omul le luă și le întinse altui marinar aflat lângă el și rămase
 man-the them took and them passed to-other-the sailor found by him and remained
 pe loc, cu revolverul în mână. (R p.90)
 on place with revolver-the in hand

“男はそれを受け取って別の水夫に渡し、拳銃を手にしたまま自分の場所にとどまっていた。”

III. 並列表現

- (26) a. La chambre restait la même : moustiquaire, murs blancs, rectangle net de
 the room remained the same mosquito net walls white rectangle clear of
 lumière ; (F p.15)
 light

- b. Odaia rămăsese așa cum o lăsase: patul cu polog, peretii albi, un
 room-the had remained as it he left bed-the with canopy walls-the white a
 dreptunghi luminat... (R p.27)
 rectangle lightened

“部屋はもとのままだった。かや、白い壁、くっきりした長方形の光。”

全体に占める割合で見ると、名詞文が 7.6%、付帯状況表現が 6.6%、並列表現が 6.1% となっている。

この数値をフランス語の定冠詞がルーマニア語のゼロ冠詞に対応している場合と比較すると、名詞文、付帯状況表現、並列表現の割合が目立つのが特徴的である。名詞文については、15 例中 12 例が修飾要素を含む名詞句となっており、前置詞の目的語の場合と同様ルーマニア語では統語的規則によって定冠詞が生起している。また残りの 3 例は、いずれもルーマニア語では他の文法機能（主語、倒置主語、直接目的語）を担っている例となっており、翻訳によって生じた表現の変更が原因となっている。従って、上記の統語的規則によって定冠詞が要求される場合を除くと、今回収集した資料のみではフランス語の名詞文の方がルーマニア語のそれよりもゼロ冠詞が生起しやすいと断言することはできない。

並列表現については、フランス語の特に文語においてゼロ冠詞が生起する例が比較的多く観察される。この傾向については Grevisse(1993)が指摘しており、表現に生き生きとした印象を与えるとしており(p.880)、フランス語における文体的な特徴であるにとらえることができよう。

付帯状況表現については、文の中での機能が叙述的なものであることから、特定的な名詞句というよりは全体として形容詞に近い機能を持っていると言える。叙述的な文脈で用いられる名詞句はゼロ冠詞で生起することが珍しくはないフランス語では、この傾向はそれほど驚くべきものではないと言える。ただし、ルーマニア語においても叙述的な機能をはたす名詞句はゼロ冠詞で生起する傾向は観察されることから、なぜフランス語においてのみゼロ冠詞が生起するのかという疑問は残る。一つの可能性として考えられるのは、書き手の文体的な特徴である。すなわち、このゼロ冠詞の使

用はアンドレ・マルロー個人の文体的特徴に帰せられる可能性がある。この点に関しては、他のコーパスを参照することによって検証する必要がある。

総括すると、ルーマニア語特有の形態統語的規則によって定冠詞が要求される文脈においてフランス語でゼロ冠詞が生起する例が最も多く(41.4%)、それに次いで語彙的な性質によってルーマニア語で定冠詞が生起するものが続いている(24.7%)。文法機能に注目すると、特に特定の文法機能に顕著に見られるという傾向は確認されなかった。

4.3. 所有形容詞が対応する場合

ルーマニア語の定冠詞がフランス語において所有形容詞で現われている例は、185例あり、全体の6.6%を占めており、これはかなり高い割合であると言える。ルーマニア語において所有を表す定冠詞がどのような分布になっているかを見るためにこれを文法機能ごとに分けてみると、主なものはルーマニア語における直接目的語 93例(50.3%)、前置詞の目的語 37例(20%)、主語 27例(14.6%)、属格名詞句 22例(11.9%)となる¹⁹。以下にそれぞれの例をあげる。

I. 直接目的語

(27) a. Avant tout, que je vous rende votre document : (F p.56)
before all that I you give back your document

b. Mai întâi trebuie să-ți dau documentul. (R p.70)
first of all I have to you give document-the

“まずお預かりした書類をお返ししましょう。”

II. 前置詞の目的語

(28) a. La Russe, de tous ses yeux, cherchait à comprendre. (F p.32)
the Russian woman of all her eyes tried to understand

b. Rusoaiaca îl privea pe baron cu ochii larg deschiși încercînd
Russian woman-the was watching man with eyes-the widely opened trying
să înțeleagă. (R p.45)
to understand

“ロシア女は目をみはって理解しようとしてつとめていた。”

III. 主語

(29) a. Ses doigts étaient de plus en plus serrés, mais les muscles du bras
his fingers were tighter and tighter but the muscles of-the arm
se relâchaient... (F p.12)
got slack

b. Degetele puteau încă strînge, dar mușchii brațului se înmuieră. (R p.25)
fingers-the could more grip but muscles-the of-arm-the got slack

“彼の指はますますきつく握りしめられていったが、腕の筋肉はゆるんでいた。”

IV. 属格名詞句

¹⁹ ここで言う属格名詞句は、フランス語では前置詞 de によって導かれ、所有を表す名詞句を指す。

(30) a. Le sourire de ses lèvres aux coins abaissés, amincies déjà, l'exprimait avec
the smile of his lips on-the corners down thinned already it expressed with
plus de complexité que ses paroles. (F p.46)

more complexity than his words

b. ... zîmbetul guri subțiate de bătrînețe exprima mai pregnant decît
smile-the of-mouth-the thinned of aging expressed more clearly than
vorbele lui ceea ce voise să spună. (R p.60)

words-the his what he would say

“すでに薄くなって口もとの下がったその唇に浮かぶ微笑は、彼の言葉以上に複雑にそのことを表していた。”

これに対して、フランス語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応している例は、既に見たようにわずかに 25 例であり全体の 0.9%に過ぎず、明らかに不均衡が観察される。一方の定冠詞が他方の所有形容詞に対応しているということは、その定冠詞が所有の意味を担っていることを意味する。フランス語の定冠詞にも所有を表す機能はあるが、基本的に譲渡不可能名詞の場合に限られる。

(31) a. Il a baissé la tête.

he lowered the head “彼は頭を下げた。”

b. Il m'a lié les mains.

he me tied the hands “彼は私の手を縛った。”

これに対してルーマニア語の定冠詞は、譲渡不可能名詞以外の名詞の場合にも所有の機能が見られる²⁰。上記の 185 例において用いられている名詞は 137 種類を数え、その中には譲渡可能名詞が 119 種類にも及ぶ。amintire「思い出」、armată「軍」、cauză「理由」、clienți「客」、document「文書」、echipaj「チーム」、gest「身ぶり」、gînduri「考え」、lăzi「箱」、mînie「怒り」、noapți「夜」、relații「関係」、sopuși「家臣」など、意味的に実に多様な名詞が数多く含まれている。このことから、ルーマニア語の定冠詞はフランス語のそれと比較し、かなり広い範囲の意味に対応する名詞の所有を表す機能をもっていると考えられる。

ここで、ルーマニア語の統語的特徴として留意しておくべき点を指摘したい。それは、与格人称代名詞と定冠詞形の名詞句が共起し、所有者が与格人称代名詞で表される構文がルーマニア語では頻繁に用いられるという事実である。Negritescu and Arrigoni(2014)はこれを所有の与格と呼び、ルーマニア語に特徴的な構文としている(p.106)。Lombard(1974)は、ルーマニア語における所有形容詞の使用頻度は西のロマンス諸語に比べて低く、所有の与格の使用頻度がかなり高いと指摘している(p.124, p.158)。Guillermou(1953)は、所有される要素がどのような文法機能をもっているかこの構文が用いられると述べているが(pp.68-69)、Negritescu and Arrigoni は特に直

²⁰ 譲渡不可能名詞は言語によってさまざまな定義がありうる概念であるが、本稿では身体部位を表す名詞に限定している。

接目的語と主語の場合に使用が顕著であるとする(pp.106-107)。今回の調査では、この構文に該当する例は 81 例に上った。以下にその一例を示す。

(32) Dădu drumul lamei care îi scrijelea degetele crispate. (p.22)

he released blade-the that him penetrated fingers-the cramped

“彼は痙攣する指の中に刃の背がくいこんでいるかみそりを放した。”

この構文では、文中の先行詞によって束縛される再帰代名詞的機能を定冠詞形名詞句がはたしていると考えることができる。この構文の存在が、ルーマニア語において被所有物を表す名詞句において所有形容詞の代わりに定冠詞が生起する一つの要因であると言える。

次に、文法機能における分布の偏りについて触れておきたい。当該の対応パターンにおいて極めて高い割合を占めるのが直接目的語である。これは、被所有物の所有者が所有の与格で表される構文において、被所有物を表す名詞句が直接目的語である下位分類が最も一般的であるためである。このパターンに属する例は 69 例である。これに続いて多いのは、前置詞の目的語である。この場合、大半は所有者が主語名詞句で表される。所有者が主語名詞句で表される場合、被所有物は主語以外の要素となるが、主語以外の文法機能で最も多く生起するのは直接目的語と前置詞の目的語であるために、この両者の頻度が極めて高いのである。属格名詞句がこれに続くが、同じ理由である程度の数が観察されると考えられる。

一方、主語名詞句における定冠詞が所有の意味をもつ場合も一定数観察される。これは、すでに述べた与格人称代名詞が所有者を表す構文であったり、文脈によって所有者が了解されることが可能である例である。前者の用法は再帰代名詞的機能、後者は人称代名詞と同様に比較的遠い位置にある要素と同一指示となる代名詞的機能と捉えることができる²¹。このように、所有者が構造上、あるいは文脈上明らかな場合において、ルーマニア語では定冠詞が被所有物を表す名詞句を決定する機能がかなり広い範囲でみとめられると言える。

最後に、所有を表す機能について、フランス語の定冠詞との違いに触れておきたい。3.1 節で述べたように、フランス語では定冠詞が所有を表す機能は限られており、定冠詞と所有形容詞が対応する比率で見ると、フランス語の定冠詞—ルーマニア語の所有形容詞は 0.9%であるのに対して、ルーマニア語の定冠詞—フランス語の所有形容詞は 6.6%とかなり異なる数値となる。これは、ルーマニア語の定冠詞がフランス語に比して所有の機能をもつ頻度が高いことを意味しているが、この原因として両言語の所有形容詞の統語的な特徴があげられる。フランス語の所有形容詞は定冠詞と同じく名詞に先行する位置に生起し、そのため冠詞を伴わないのに対して、ルーマニア語の所有形容詞は 3.1 節で述べたように名詞に後続する位置に生起する上に、定冠詞と共起する。このことは、所有形容詞の占める統語的位置が通常の形容詞と同じく、名詞句内で焦点が置かれやすい位置であることを意味している。このため、ルーマニア語の所

²¹ 生成文法の観点からは、再帰代名詞的機能は照応表現(anaphor)、代名詞的機能は代名詞表現(pronominal)にそれぞれ対応するものである。

有形容詞はフランス語の所有形容詞よりも情報的に重要な位置を占める場合に用いられるのに適しており、それ以外の場合には不向きな要素であると言える。従って、所有者の情報の価値がそれほど高くない場合、例えば文脈から容易に理解される場合には統語的により軽い要素、すなわち決定詞の位置を占める定冠詞が所有形容詞の代用として用いられると考えられる。すでに述べた、与格人称代名詞が所有者を表す用法が頻繁に用いられることも、ルーマニア語におけるこの傾向を強めていると言える。

4.4. 指示形容詞が対応する場合

3節で述べたように、フランス語の定冠詞がルーマニア語の指示形容詞に対応している例は、全体の0.8%と極めて低い割合となっている。この傾向は、ルーマニア語の定冠詞がフランス語の指示形容詞に対応している例の場合にも同様である(2.2%)が、こちらの方が若干高くなっている。以下にそれぞれの言語において指示形容詞が対応している例を示す。

I. フランス語の定冠詞がルーマニア語の指示形容詞に対応している例

(33) a. ... rien de tout cela n'existait en face de la fatalité qui décolore les formes
 nothing of all that existed in front of the fate that fades the forms
 dont nos regards sont saturés. (F p.52)
 of which our looks are tired

b. Nimic din tot ce existase nu mai putea lupta cu acea fatalitate care
 nothing of all that existed no longer could fight with that fate that
 decolorează lucrurile și ființele privite prea mult. (R p.65)
 fades things and persons watched too much

“そうしたすべても、我々の目が十分に見てきた形を色あせたものにする宿命の前では、存在しないも同然だった。”

II. ルーマニア語の定冠詞がフランス語の指示形容詞に対応している例

(34) a. Trebuia să privească trupul. Și capul. (R p.22)
 it is necessary to watch body-the and head-the

b. Il fallait voir ce corps. Le voir, voir cette tête ; (F p.10)
 it is necessary see this body it see see this head

“その肉体を見なければならなかった。肉体を見、その顔を見なければならぬ。”

定冠詞と指示形容詞は、定性という観点からは定という性質を共有しているが、定性以外の点で両者の機能が明確に区分され、その区分が両言語において共通しているためにこのような傾向が見られると考えられる。2節で見たように、Leeman(2004)は定冠詞とそれ以外の定の決定詞の相違点として、前者には特徴づけという機能がない点を指摘している。指示形容詞は、指示性の高さによって特徴付けを行っていると言える。指示形容詞は、発話状況において存在する事物を直接指示する直示表現に代表されるように、極めて指示性の高い要素である。これに対して定冠詞は、談話において既に導入されているなどの理由によって、聞き手が名詞句の指示対象を容易に特定できるような状況において用いられる決定詞である。同様の特徴はルーマニア語におい

“からだは不安定で、横向きのままだった。”

II. ルーマニア語の定冠詞がフランス語の不定冠詞に対応している例

(37) a. Direcția Militară constituise un stat major, Adunarea Partidului
direction-the military had constituted a general staff office assembly-the
alesese Comitetul Central;
had elected committee-the central (R p.38)

b. La direction militaire avait constitué un état-major, l'assemblée du
the direction military had constituted a general staff office the assembly of-the
parti avait élu un comité central ;
party had elected a committee central (F p.25)

“軍事指導部は参謀本部を設立し、党の集会は中央委員会を選挙で選んでいた。”

既に述べたように定冠詞と不定冠詞は定性に関して対立する要素であり、本来対応することはまれであるように予想される。しかし、今回の調査によって得られた数値は決して低いと断言できるものではない。これは、言語運用において、定と不定という対立が絶対的なものとは限らず、若干の連続性をもっていると考えられる。Fujita(2012)ではフランス語とスペイン語について、また Fujita(2013)ではフランス語とイタリア語について、それぞれ不定冠詞の分布の観察をもとにして、不定冠詞と定冠詞の機能は必ずしも相反するものではなく、両者の関係は連続的なスケールでとらえられるものであると論じている。同様の傾向は、今回の定冠詞の分布をもとにした観察からフランス語とルーマニア語においても見られると言える。両者の割合を比較すると、顕著な差は見られない。このことから、今回の調査の結果からは、両言語における定冠詞と不定冠詞との関係において大きな違いは観察されないということになる。

ここで補足しておきたいのは、定で表すか不定で表すかという選択は、発話者、この場合は書き手の判断にゆだねられるという点である。言うまでもなく、翻訳とは一方の言語から他方の言語への機械的な置き換えではなく、翻訳の目標言語において自然な表現へと変換することがしばしば行われ、その判断は言語としての特質に基づいたものもあれば、翻訳者の文体的な志向に大きく影響を受ける場合もある。例えば、以下の例は後者に属すると考えられるものである。

(38) a. Rien n'y indiquait le combat... (F p.12)
nothing there indicated the fighting

b. Nimic nu arăta că acolo avusese loc o luptă. (R p.24)
nothing not indicated that there had happened a fighting
“戦いのあとを示すものはそこには何もなかった。”

(39) a. Ceea ce îl îngrozise era senzația că între el și May se ridicase o
what him scared was feeling-the that between him and rose a
barieră, făcută nu din ură, deși și ura se amesteca în ceea ce
barrier made not from hatred though also hatred-the mixed in what

simțea, și nici din gelozie... (R p.68)
he felt nor from jealousy

b. L'essentiel, ce qui le troublait jusqu'à l'angoisse, c'est qu'il était tout à coup
the essential what him troubles as far as the agony it is that he was all at once
séparé d'elle, non par la haine — bien qu'il y eût de la haine en lui — non
separated from her not by the hatred though there was some hatred in him not
par la jalousie... (F p.55)
by the jealousy

“重要なことは、彼の心を苦しいまでに乱していることは、彼が突然彼女から引き離されたことだった。それは憎悪のせいでもなければ一心の底に憎悪はあるにはあったが—また嫉妬からでもなかった。”

(38)では、原典のフランス語では「戦い」をすでに言及されたものとして直接目的語に置いているために定冠詞が用いられているが、ルーマニア語の翻訳では「戦いが生じた」という事態の発生を表す述語表現を選択し、「戦い」がその主語として置かれているため、不定冠詞が用いられている。また、(39)では、フランス語原典では「憎悪がある」という存在表現が用いられているため不定の部分冠詞が用いられているが、ルーマニア語の翻訳では「混ざっている」という動詞の主語として「憎悪」という名詞が総称的に用いられていることから定冠詞形で表現されている。

両言語における定冠詞と不定冠詞の関係については、様々な角度から更に考察を進めなければならないが、そのためには複数のテキストからのデータ収集が必要となってくるため、今後の課題としたい。

5. 結論

フランス語とルーマニア語における定冠詞の分布と他の要素との対応関係をもとに、両言語における定冠詞の特性を対照的に考察してきたが、両言語における共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

共通点 i) 指示性の高さという点において性質が異なる指示形容詞との機能分化が明瞭である。

ii) 定性の値が異なる不定冠詞との機能分化がある程度なされているが、定冠詞に不定冠詞が対応している例が一定数観察される。このことから、定冠詞と不定冠詞の間に若干の機能的連続性が存在すると考えられる。

iii) ゼロ冠詞との交替が一定の割合で観察される。

相違点 i) ルーマニア語の定冠詞がフランス語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して、フランス語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応する例は少ない。これは、ルーマニア語において所有の与格という構文が頻繁に用いられるという統語的特徴によるところが大きい。与格人称代名詞が生起しない例も多く見られることから、ルーマニア

語の定冠詞はフランス語の所有形容詞の機能の一部をになっていると言える。

- ii) フランス語の定冠詞にルーマニア語のゼロ冠詞が対応している例の方が、ルーマニア語の定冠詞にフランス語のゼロ冠詞が対応している例よりも多い。
- iii) フランス語のゼロ冠詞が対応している例が一定数見られるのは、ルーマニア語の定冠詞が格標示の機能、及び修飾要素が後続することを明示する機能を担うという、形態統語的な特徴によるところが大きい。

以上の結果から、両言語の定冠詞は基本的な性質を共有しているものの、一部でその機能に相違点があると言える。所有表現については 4.3 で述べたようにルーマニア語の特異性が従来の研究において指摘されていたが、本論でそれが統計的に証明されたことになる。また、ルーマニア語ではフランス語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという特徴が、本稿での調査によって確認された。この特徴は、同じロマンス諸語に属する両言語の相違点として注目すべき点であると言える。ただし、筆者の従来の研究で指摘されたフランス語においてもゼロ冠詞の生起が決してまれではないという事実が、ルーマニア語と比べても確認された。他の要素、例えば指示形容詞や不定冠詞の生起例の割合に比べると明らかに高い数値を示しており、フランス語においても一定の環境において比較的指示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが再確認されたと言える。

今回の調査では、一つの文学作品のみを分析対象としたが、別のテキストも分析対象に含めることにより、統計的に更に信頼できる形で今回の結果を検証することを今後の課題としたい。

参考文献

- Batchelor, R. E. and M. Chebli-Saadi (2011) *A Reference Grammar of French*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de linguistique générale, 1*, Gallimard, Paris.
- Deloffre, Frédérique and Jacqueline Hellegouarc'h (1988) *Éléments de linguistique française*, Editions C.D.U. et SEDES réunis, Paris.
- Fujita, Takeshi (2012) “Considérations contrastives de l'article indéfini en français et en espagnol” 『北海道大学文学研究科紀要』, 第 138 号, pp.31-62.
- Fujita, Takeshi (2013) “Distribuzione sintattica dell'articolo indeterminativo in italiano e in francese”, 『北海道大学文学研究科紀要』, 第 140 号, pp.99-129.
- Goga, Mircea (2001) *Limbă română—Morfologie Sintaxă Ghid de analiză morfosintactică*, Editura Limes, Cluj.
- Grevisse, Maurice (1993) *Le bon usage*, Duculot, Paris.
- Guillermou, Alain (1953) *Manuel de langue roumaine*, Éditions Klincksieck, Paris.
- Hollerbach, Wolf (1994) *The Syntax of Contemporary French*, University Press of America, Lanham.

- Judge, Anne and F. G. Healey (1995) *A Reference Grammar of Modern French*, NTC Publishing Group, Lincolnwood.
- Leeman, Danielle (2004) *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Presses Universitaires de France, Paris.
- Lombard, Alf (1974) *La langue roumaine*, Éditions Klincksieck, Paris.
- Maingueneau, Dominique (1994) *L'énonciation en linguistique française*, Hachette, Paris.
- Martinet, André (1979) *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier, Paris.
- Negritescu, Valentina and Davide Arrigoni (2014) *Grammatica romena*, Ulrico Hoepli Editore, Milano.
- Pană Dindelegan, Gabriela (2003) *Elemente de gramatică*, Humanitas Educațional, București.
- Price, Glanville (2003) *A Comprehensive French Grammar*, Blackwell Publishing, Malden.
- Wagner, Robert Léon and Jacqueline Pinchon (1991) *Grammaire du Français classique et moderne*, Hachette, Paris.

引用テキスト

- André Malraux (1946) *La condition humaine*, Gallimard, Paris.
- André Malraux (1994) *Condiția umană*, traducere Irina Eliade, RAO, București.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail：fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学